



戸田市教育委員会
教育長 戸ヶ崎 勤

* 挨拶 *

令和6年度戸田市立教育センター教科等研究グループ（教育センター研究員）等による研究の成果がまとまりましたので、ここに「戸田市教育研究集録」として刊行いたします。

昨今は、ICTの積極的な利活用により効果的な学びや非同期の学びが進んでおりますが、教科の本質を踏まえ、子供たちに学ぶ楽しさを味わわせ、各教科等の資質・能力を身に付けてさせていくことは、授業づくりにおいてこれからも大切にされなければならないことと考えています。

戸田市教育委員会では、教科の見方・考え方を働かせた授業づくりや、学級経営の充実に向けて、学校訪問や昨夏の授業の根幹研修会等をとおして指導・支援方法の工夫や助言を行っているところです。日々の授業において、先生方の不断の教材研究により、各教科等における学ぶ楽しさや本質を捉えた学びを追究し、子供たちに学ぶことの楽しさを存分に味わってほしいと思っております。

1年間、真摯に研究を進めてこられた66名の教育センター研究員の先生方に対し、敬意を表しますとともに、今後も多くの先生方が各教科等の研究や教科の本質を捉えた学びの推進役として、各校の研究をリードし、誰一人取り残されない学びの担い手となっていただくことを期待申し上げ、挨拶いたします。

リーディングスキルテストの共同研究



国立情報学研究所社会共有知研究センター長
情報社会相関研究系教授

新井紀子氏

戸田市では、2018年度から一部の小・中学校で、2022年度からは全小・中学校で、リーディングスキルテストを受検しています。リーディングスキルテストは、教科書など、知識を獲得することを目的として書かれた文書を、どれだけの確に読み解くことができるかを診断するテストです。リーディングスキルテストは、学校で行う達成度テストや、文部科学省や埼玉県が行う学力調査とは異なり、提示される文章の中に答えが含まれているので、知識の多寡や定着を測るものではありません。

その一方で、埼玉県学調とリーディングスキルテストの間には、表1で示すように高い相関があることがわかりました。「リーディングスキルテストの能力値が高い、特に6分野の平均能力値が高い児童生徒ほど、学力が高くなるはっきりとした傾向がある」といえるでしょう。全国学調のアンケート項目と学力との相関係数よりはるかに高い相関です。教科への興味関心、自己肯定感、学校への満足度等の学習者の主観、あるいはアクティブラーニングやICT活用の頻度などの学校の授業形態よりも、RSTが測る能力の方が、学力を直接左右することが窺えます。

表1. 埼玉県学調とRST平均能力値との関係

相 関 関 係	小6 (1186)	中1 (1129)	中2 (1004)	中3 (1016)
英 語			0.673	0.662
国 語	0.788	0.741	0.792	0.779
数 学 ・ 算 数	0.729	0.656	0.745	0.717
埼玉県学調 平均	0.804	0.745	0.798	0.779

※RSTの平均能力値＝RSTの6分野の能力値の平均値

※すべて $p<0.001$ で有意

■ オーバーパフォーマーとアンダーパフォーマー

学力とRSTの能力値との相関係数が0.7～0.8ということは、比例しているわけではなく、少しは外れ値があることを示しています。RSTの能力値から期待される学力よりも高い学力を発揮する層を「オーバーパフォーマー」、逆に期待される学力よりも低い学力しか発揮できていない層を「アンダーパフォーマー」と呼びます。アンダーパフォーマーには、学びに向かうことができない多様な要因（家庭環境、友人関係、他に

関心事がある）があるでしょう。学校・保護者・地域・専門家などがチームで支援をすると、驚くほど学力が向上する例が見られます。一方、オーバーパフォーマーは、学校の成績も悪くなく、努力家で、責任感もあることから、教科書の読みにつまずいていることに教員や保護者、本人すら気づかないこともしばしばあります。

オーバーパフォーマーは、成績が下がり始めると、暗記やドリルなど過去に成功した勉強方法を変えずに、勉強時間を増やすことで挽回しようとしませんが、小学校高学年の算数の文章題や、中学校の理科や数学、英語や国語の文法などはそれでは通用しません。特に、他の生徒が高校入試に向けて学習時間を増やすようになると、相対的に成績が下降し、大きな挫折に直面することもしばしばあります。

RSTを継続的に受検することで、オーバーパフォーマーを早期発見し、高校入試まで十分時間があるうちに、教科書の読み方、勉強の仕方の修正を促すと効果的です。効果的な学習修正方法は〔1〕にまとめましたので、参考になさってみてください。

■ 生活言語と学習言語

戸田市では、2024年度から、RSTに加えて「リテラシーテスト」というテストも試験的に導入しています。中学校のすべての課程を終え、高校入試が済んだ中学三年生の希望者が受検しています。そこから、大変興味深い結果がわかりました。

RSTの能力値が低い生徒は、次のような「助詞の穴埋め問題」を苦手としているのです。教科書の該当箇所を見て、意味が変わらないように助詞を埋めていく問題です。

「全国には大名が配置され、各地の支配を任されました。大名とは将軍から1万石以上の領地をあたえられた武士のことで、大名の領地とそれを支配する組織のことを藩といいます。」（東京書籍「新しい社会 歴史」）問題はこちらです。

「幕府は、将軍〔 〕1万石以上の領地をあたえた武士〔 〕大名として全国に配置し、各地〔 〕支配させました。大名〔 〕与えられた領地とそれを支配する組織〔 〕藩と呼ばれます。」

元の文と意味が変わらないように〔 〕に（「は」以外の）平仮名一字を埋めていきます。全部正解できて正解と考えると、戸田市の生徒の正答率は6%に留まりました。どうやら、助詞を正確に使って構文を把握する、という所からつまずいている生徒が多数いるようです。

日常生活では、助詞はしばしば省略されます。「あれ取って」「やっぱりいいや」といった具合です。日常会話では、表情・声音など多様な情報が文を補完することで曖昧性が解消されるので、不自由を感じないでしょう。一方、教科書の文章を始めとする学習言語は、助詞を始めとした「機能語」を適切に使うことで、曖昧性がなくなるように書かれています。どのような文脈で手にとっても、確実に目的とする知識が読者に伝達されるように工夫されているのです。生活言語でのコミュニケーションには長けた児童生徒でも、助詞をはじめとする機能語の習得に失敗すると、教科書を巧く読み解くことができず、学力が伸び悩んでしまうようです。

一方で、教員は知識といえば、学習用語を定着させることだと考え、機能語を軽視し、学習用語を穴埋めするプリントを作成しがちです。その教育手法では、助詞を使いこなせず、自力で教科書を読み解く生徒を育成するのは難しいことが、この例題の極めて低い正答率が示しているといえるでしょう。

私たちは、知識を伝達するために書かれた文章を、確実に読み解く力を「シン読解力」と名づけ、シン読解力を定着させられるかどうかで、児童生徒の将来が大きく左右されることを、戸田市を含む過去8年間の50万人のRST受検者の分析から明らかにしました〔2〕。シン読解力は、才能ではなく、適切で科学的なトレーニングによって伸びる力です。ただし、現状の学校教育では、そこが十分に開発されていないことが残念です。読めばわかるはずの文章（例：教科書、学校の「お知らせ」や入試要綱など）の読みに失敗した生徒に、「ちゃんと（しっかり）読んでごらん」のような非科学的指導をしていませんか？〔1〕や〔2〕でご紹介したトレーニング方法も参考に、ぜひ科学的手法で、シン読解力育成に取り組んでみてください。

参考文献

- 〔1〕新井紀子「新井紀子の読解力トレーニング」、東京書籍、2025年。
- 〔2〕新井紀子「シン読解力」、東洋経済新報社、2025年。

助詞例題の正解：が／を／を／に(が)／が